

門 昭 4
號 216
卷 3



若山
松屋
書林

金毘羅參詣名所圖會卷之二

目錄

- | | | | |
|-----------|---------|---------|---------|
| 西行菴の松の圖 | 西行堂 | 西行菴遺蹟 | 芭蕉塚 |
| 花の井 | 後嵯峨院御廟 | 龜山院の御塔 | 後宇治院の御塔 |
| 仙遊が原 | 遊墳 | 大墳 | 金倉寺 |
| 智證大師誕生のお跡 | 訶梨帝母社 | 不動王出現の圖 | 永井の清水 |
| 甲山寺 | 岩屋の毘沙門天 | 世に観音の佛 | 廣田の池 |
| 雲氣の神社 | 筆の山 | 筆の海 | 芋畑の古跡 |
| 曼陀羅寺 | 西行笠掛櫻 | 笠松 | 出釈迦寺 |
| 捨身が嶽 | 世坂 | 出釈迦山 | 大塔の旧趾 |
| 護摩壇の古趾 | 中山 | 水笠が岡 | 西行菴の古蹟 |



碧水藏書

七佛薬師堂	古験の松	於婆の池	人面石
花立の碑	頼政箭止の松	樋戸野の池	弥谷寺
護摩堂	道範阿闍梨の像	求聞持の岩屋	盤石の二尊
加持水の籠	降釵の古跡	六本杉	十王堂
中院茶堂	法雲橋手掛岩	比丘尼谷	二天門 二王門
灌頂川	瓶岩	生駒一正屋の塔	香川累代の墓
山崎俊家の塔	山崎志州祖母の塔	大塔四郎右門の塔	穴葉師堂
天霧山の古城	香川長曾叔部和親之圖		勝岡の石の塔
本山寺	高良の神社	本山寺古楹	神照寺
植田の松の圖	琴彈八幡宮	任吉三神の社	若宮権現の社
大師堂	上の菴	九重の石の塔	鐘樓中之菴

金三ノ目ノ

龍宮風宮天神社	鹿島の神社	一之鳥居二之鳥居	宿居
十王堂下之菴	梅腋の濱	漆川	三架橋
放生川	琵琶の首	象ヶ鼻	竹の溪
問答石	二本松	観音寺	中金堂
愛染堂大師堂	西金堂	宝塔の四趾遍照塔	弥勒堂
太子堂籠堂	五所権現の社	青丹明神社	茶堂根待所
五智如来石像	二王門	天神社稻荷社	日澄上人の墓
芭蕉公習早苗塚	有明の濱	漁夫烟鬼の圖	観音寺川口
山口の清水	悪魔石	燧灘 丸瓶島	伊吹嶋大嶋
高稲積山	高谷神社	不動の籠	一夜菴
伊勢三郎智謀之古趾	同圖		

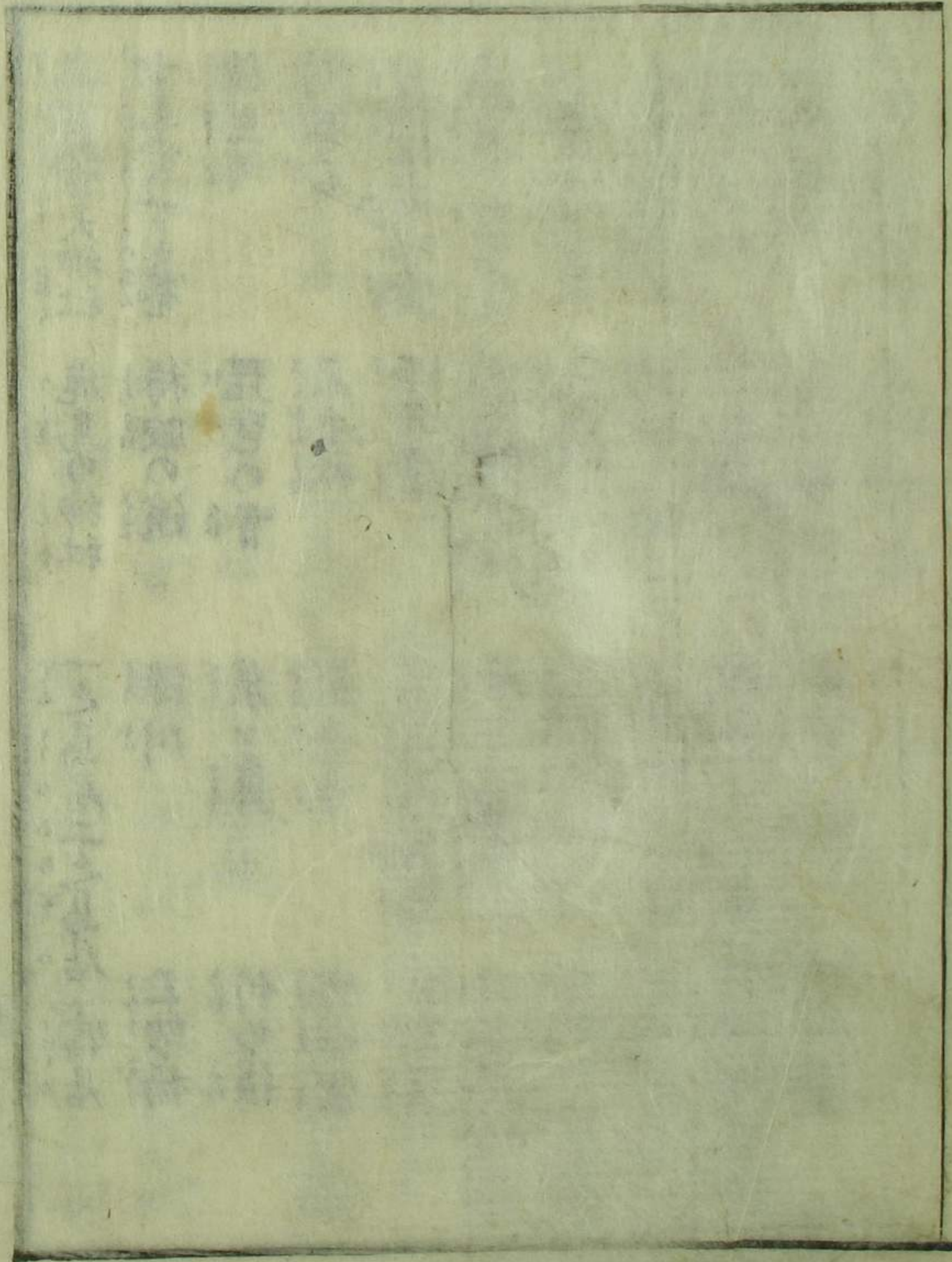


西行庵の遺跡
久乃松

稍左

西行堂

西行庵



あつと秋阿の自記ありと季吟抄に云く

西行菴

今尚ほあつと草庵を建てていつの日のことせう國中のね士折くまはる
わがの舎と備へし土人いよむるしと

芭蕉翁之塚

西行菴のむすの傍より自然石の碑を建
石面に祖芭蕉翁の塚ト書ス

花之井

西行菴の井の傍より灌漑し双ひあそぶ泉ありト云西行上人在世より
有て平生小僧とせしれと云傳ふ

後嵯峨院御廟

山後後宇多院の御塔を建廊の西門ありて園築垣深かり

日本王代一覽曰

後嵯峨院 諱邦仁土御門院ノ第二子也母ハ源通子宰相中將通宗カ
娘ナリ美久ノ亂ニ僅ニ三歳ナリシヲ土御門ノ大納言源通方外戚ノ親
アルニヨリテ養育シ奉ル十八歳ノ時通方卒スル故ニ祖母兼明門院ノ
許ニウツリ坐カナル体ニテ御座マス仁治三年正月四條院崩レテ御子モチ
ク御連技モナケレバ誰カ繼體ノ君タルベキト沙汰アリ順徳院此時佐渡
國ニテ恙ナクハラシメシ其御子忠成京ニマシメテ藤原ノ道家ノ外

後嵯峨院御廟

左右に龜山院 後宇多院の御塔あり

龜山院 諱恒仁後嵯峨院

第六王子也正嘉二年八月東宮立

正元元年十一月即位

嘉元三年九月崩御壽五十三

後宇多院 諱八世仁

龜山院ノ太子ナリ

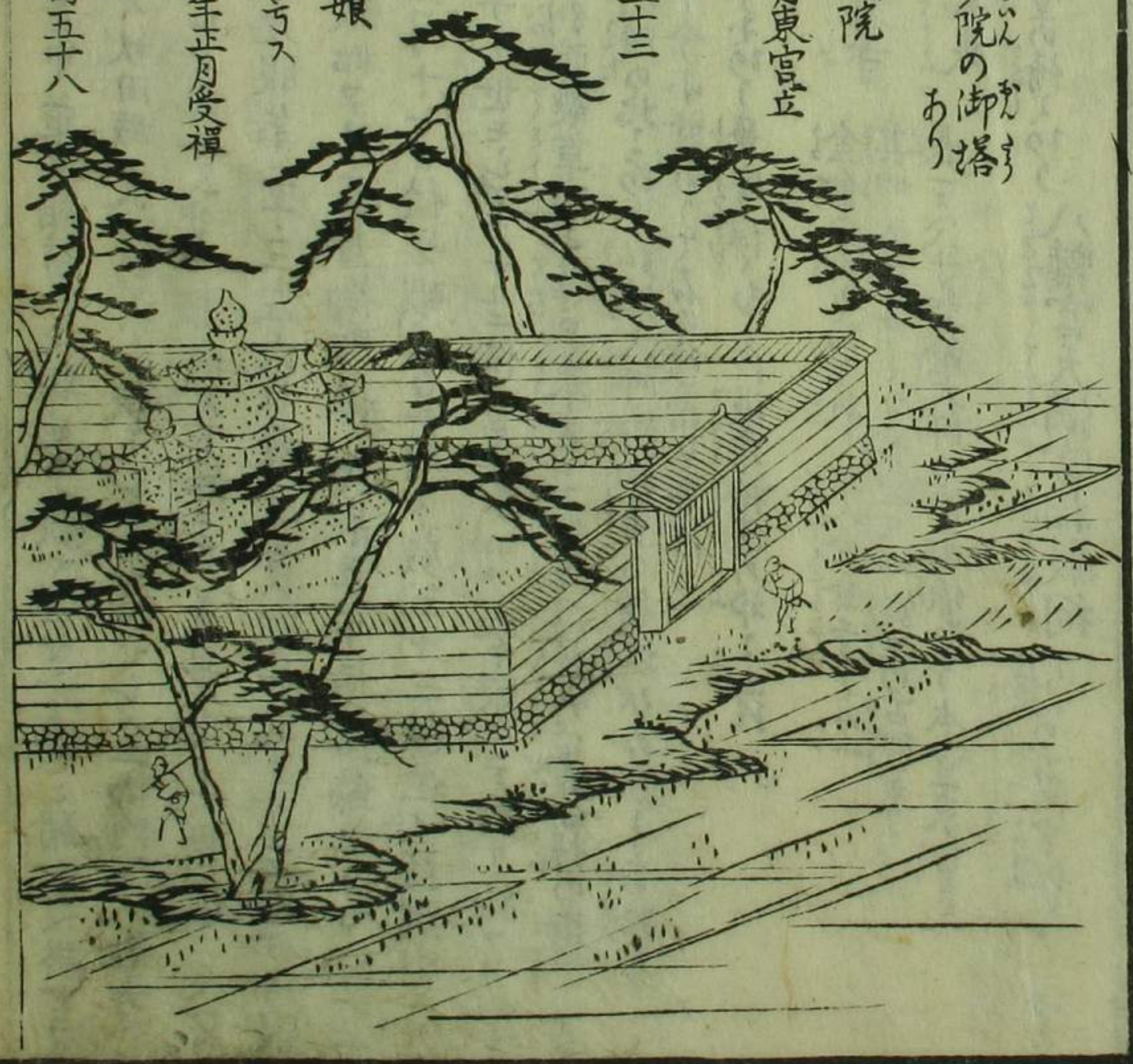
母左大臣藤原實雄カ娘

姞子也後京極ノ女院ト号ス

文永四年十二月誕生同十一年正月受禪

同三月即位時二八歳

正中元年六月崩御壽五十八



孫ナレハ是ヲ位ニ着申道家相替ラズ朝廷ヲ我マニセント思ヒ關東ニ誘セラ
 ル恭時兼引セズ秋田城ノ介義景ヲ使トシテ上洛セシメ土御門院ノ御子ヲ
 御位ニ即申スベシト云合ム中畧 恭時カ下知ニテ義景申上ハ異儀ニ及ハズ
 同月二十日邦仁元服年二十三左大臣藤原良實加冠タリ左中辨定嗣
 理髪タリ二月政始アリ三月御即位 文永五年御落飾アリテ法皇
 ト号ス同九年二月十七日後嵯峨法皇崩ス歳五十三讓位ノ後院中ニテ
 政ヲ聞コト二十年余世モシツカナルニ依テカクノ如ク安樂ニテ終リ給フト云々
 増鏡 十八日嵯峨龜山の別院藥草院小坪ヲ奉る有然レ此所御菩提の御塔此
 仙遊原 遊墳 今小堂ありて石の地花と安レ
 大墳 地藏堂のかりり事実詳も遊考拾遺の記出レ

鶏足山寶幢院金倉寺

本尊 藥師如來

阿弥陀堂

本堂の傍に

八幡宮天満宮相殿祠

門内の右の方位の

金三ノ二

金倉の御一ツの故土人金倉寺といふ
 其始道喜寺といふ智燈大師誕生の古跡あり
 長一ノ八寸智燈大師の作座像あり本堂東む

御影堂

門内の左の奥にあり智燈大師の尊像と安レ

訶利帝母社

御影堂並ぶ

新羅社

訶利帝母の社の傍にあり新羅明神と勸清

鐘樓

新羅社の前あり

二王門

金剛神の兩尊と安レ東向

當寺略縁起云

當寺ハ合西十九代光仁天皇寶龜五年の草創トテ和氣道喜の建立トシテ
 故道喜寺ト号ス然レ其後醍醐天皇延長六年勅ありて金藏寺ト
 改ム金倉の郷ト有故なり其境北に海ニ方ハ山トシテ城トテ無尊者乃
 入定給テ天子の鶏足山の大洞ト相化レバト鶏足山ト稱シ原來智燈
 大師誕生の靈場也故ト往昔盛んニ時ハ境内南北數十町東西十余
 町ありて國中第一の伽藍なり智燈大師唐土より見の山所の繪圖トシ
 して飛驒の通其工妙とつくつく佛殿僧房もまはせし金倉寺の

唐阿堂と申せしむる然れども建武天文の兵乱焼失し忽ち其跡
と亡し只草堂小古佛真影と納り置のころと寛永十九年 國
守伽藍と再建したる寺領と寄附ありせしれ再び四跡といひ
給ふと云々 則四國靈場七十六番札所なり

智證大師自筆の御影 清來の曼陀羅 鏡鉢 十六善神ホ其余計
寶祥寺ありし事も事とけりまに書く

智證大師當郷の出生して名圓珍姓和氣氏父宅成母依佐
氏より則ち弘法大師の姪子にのりて其母夢朝日口一介見
孕弘に六年一誕生給ふ兩眼腫重項骨隆起益と覆り如
む性質敏くして幼いにも老成の量あり八歳の時父を啓して
典の内周果經し言の有り願く我として誦習しめたること父

驚以異即ち尋の得て是とも十歳の時毛待論語漢書文選
十四歳して家と離れ十五歳して延暦寺の座主義真を師として

事十九歳の時菩薩戒を受けに明天皇寵遇盛なり廿二歳して南
都の明達と大義と決擇し此より其名朝野に播るる程山王権現の

告固て奏を経て入唐に壽二年八月十五日福州の境小着く時に
唐の宣宗帝大中七年より開元寺小寓中天堂の那蘭陀寺の

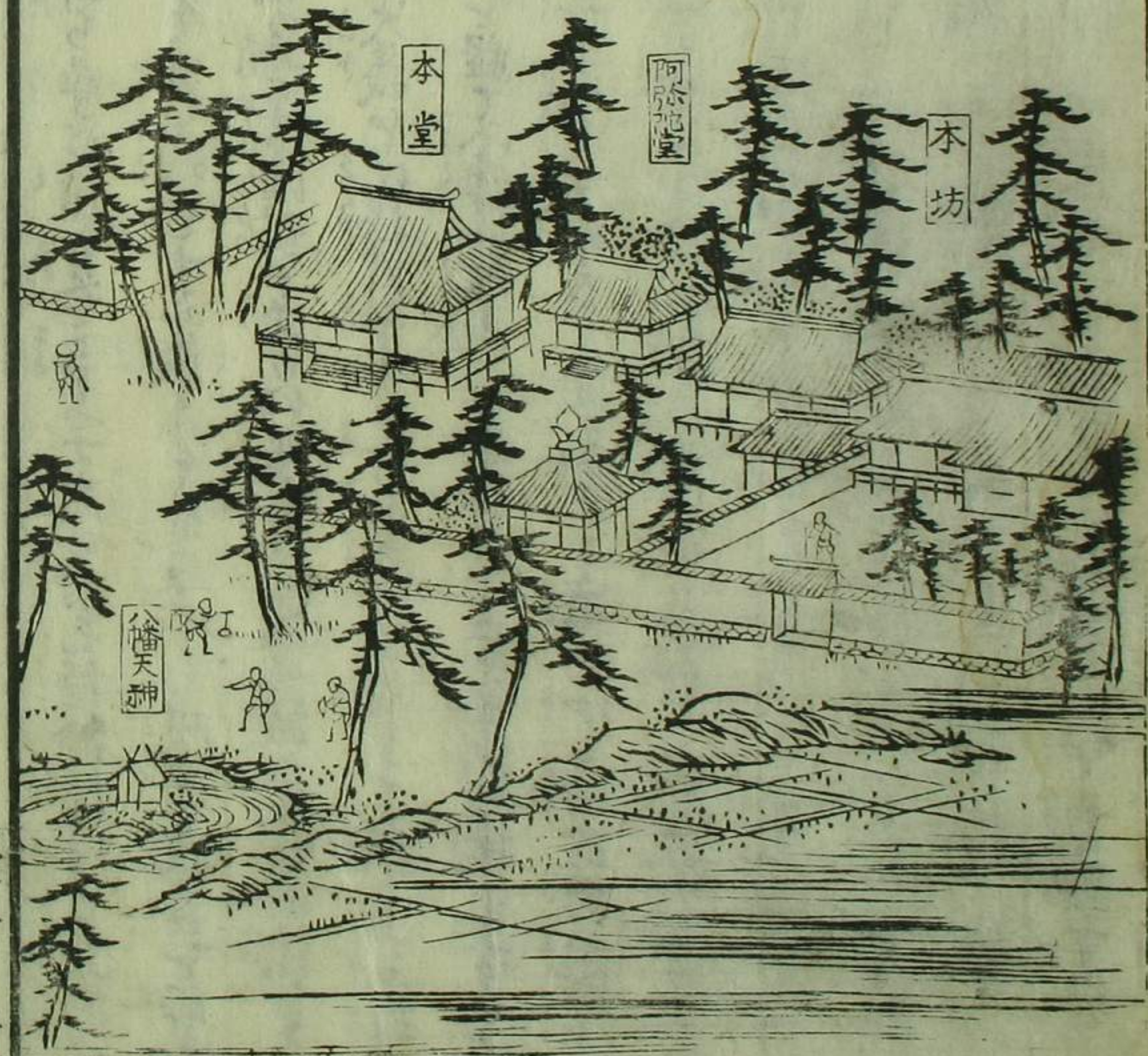
僧般若若拙羅一逢て林字宗景曇章と号す其時金剛界胎藏界諸
の印法等と授り天台山上より石窟ありて其洞中小石七鼓

あり古智者大師説法の時これと撞て衆を集められん後法
とてども聲あり圓珍試ふ小石をりて是を打つ勢山を

震ふ諸僧駭と嘆せむる事又長安にて青龍寺の法金一

金倉寺

當山の河利帝母
 智燈大師在世再
 度出現の教法
 護持の誓願盡鎮
 撫の約法を立の
 心天師護法善
 神と称号一祠を
 建立祭礼せり
 給ふ所して重験
 殊更のらぶる
 是よりして遠近の
 國々郷々より子と



願い安産をのり
 けい懐胎の事
 求り又氏子とあり
 て名をいひ
 願ひ除病とのり
 福貴せり
 福しのむむの願
 成せむ
 ふしすの縁起
 委し
 祭例月十二日
 大祭九月廿八日
 有信の貴賤郡奉
 て大ふ





金色の不動尊
難風とらふ

錫 瑜伽の密上旨及び灌頂を受て蓋以所底と倒して是に授て天
 安二年高船に乗つて帰朝し肥前松浦に至り留學せしむる夏凡七
 年得る所の経書千餘卷と表する貞觀十年乙井の圓城寺と以
 て傳法灌頂道場の爲に圓珍小賜又延曆寺の座主と爲る寛正三
 年僧都に任じ同四月廿九日逝し時年七十八嘗て耳目聰明
 して食と物精養と擇む門下阿闍梨の位と受る者百余人年自
 剃髮と爲る弟子五百余人延長五年智證大師と溢賜ふ
 初め唐の時難風暴起て船異國に漂流し圓珍目と閉て不動明
 王と念ひ時金色の人忽然と船先より現る頃更あつて順風來り
 翌日福州に着岸し則ち拜する所の像と画して命じて國に歸
 して以來乙井寺一流の不動尊皆金色と其余奇特妙事と云ふべ

永井清水

永井村より土人印の清水もつ其事詳う此井泉の地也
永井のすや道標に雙びうた清泉として四時とも湧き出し分てる日の
本署に往還の旅客湯を伺ふ衣西風もんとり冷て高し

醫王山寶院甲山寺

廣田村より土人甲山寺より四圍遍禮七十四番の礼所也

本尊 藥師如來

長二尺五寸座像弘法大師の御作本堂東むけ

御影堂

弘法大師の尊像と安ん本堂東むけ

鐘樓

内傳あり

茶堂

圓蓋

窟毘沙門天

大師堂の傍窟の内あり弘法大師の作厨子石にて刻む
山中に西国三十三所の觀音の石佛を建置けり

本坊庫裏

門内の衣あり

石橋

門前の川に渡り

當寺に往昔大伽藍として堂塔魏々としてとも凌峯荒廢して其跡

も夫ふ然きども本尊榴櫛光佛大師の御作として靈驗尚ほあり

後山林繁茂一帯に曠野と見ゆ田畠綺のてく氏家相接まら

廣田池

廣田村より大朝比奈の池より傳ふ昔朝比奈の池より武士とて討たれ
其墳地の中より故に名に於て是れ本堂とてつるがや一傍の年々つるに云

永井の清水

一池

松の影にまは

清水
可也



泉に濫泉は泉汎泉の二あり

爾雅ニ云

濫泉正出正出者

從下上出也汎泉

垂出垂出者下出也

汎泉穴出穴出者反出也

然ま此永井の水ハ所謂濫泉ナリ



雲氣神社 後田村の延喜式出度郡二座之内
 後世中絶し雲氣派との古跡ありと遊龍殿あり

二代實錄曰貞觀元年授讚岐國雲氣神五位下

筆の山 巖倉村の向ふ高く筆の山あり

筆の山はかたのびりても見つる代昔は下なる地也と云ふ

筆の海

同所といふ今一島の田島とて其名の残る昔八筆の山の辺に海ありて
 樹の深きところありて地名を藤原と名づくを陰桑とてつりて
 若らう通のくさくさ標のありて若らう標とて文字詳くあり
 若らうとて若らうとて筆の海かきまて「ハ」の字ありて海あり

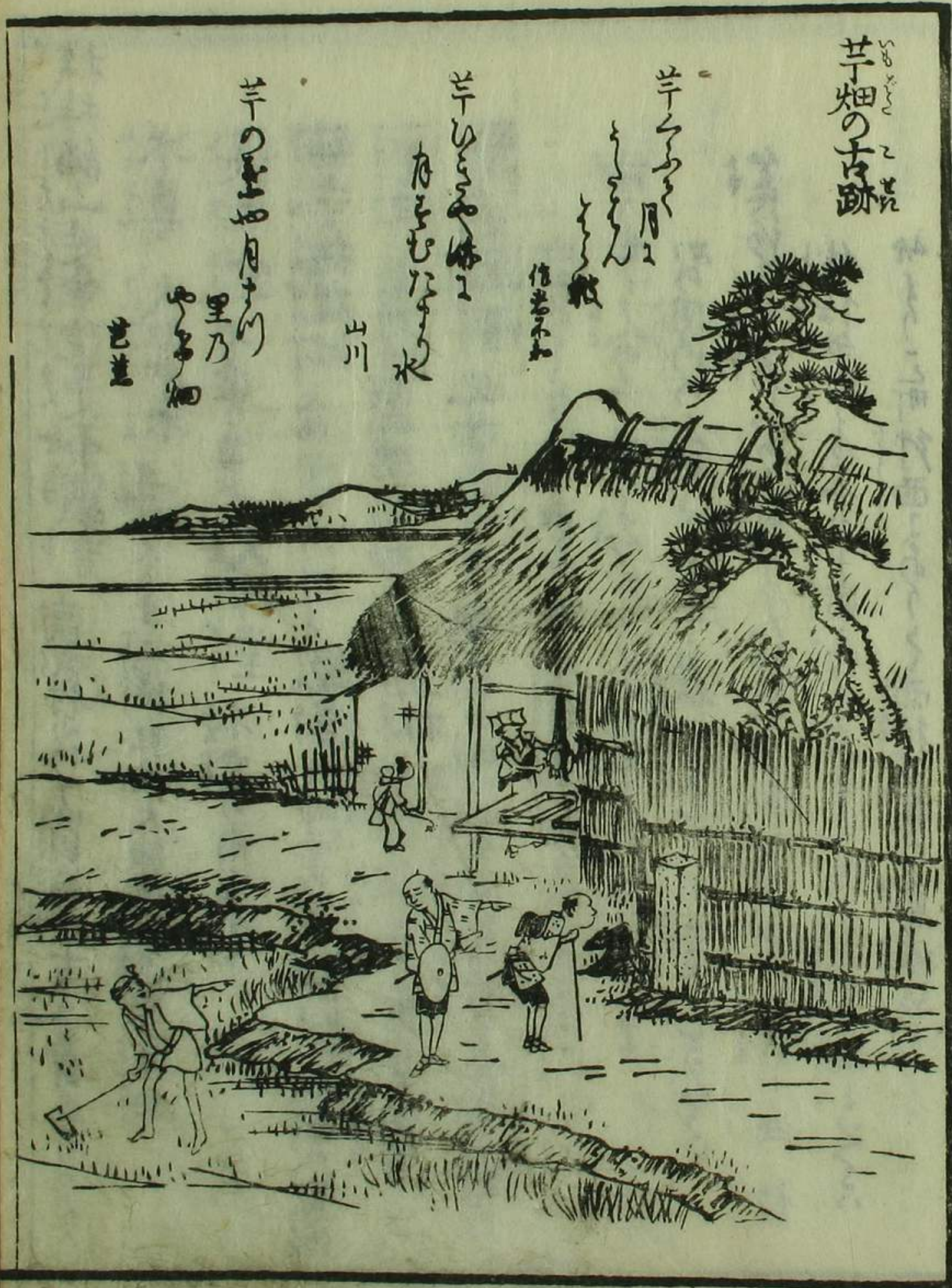
日蓮のまゝのまゝや筆の海 玉光

月雪のふびやまゝのまゝ筆の海 護物

芋畑の古跡

同村農家の祖傳標をありたるの奇と傳は

月とてやりのまゝも伝のしと起しよまゝ何と云ふと云ふ 西行上人



我拜師山延命院曼荼羅寺

葭原村より田邊七十三番の北所なり

本尊 大日如來

長二尺五寸三像 弘法大師作 本堂東向

護摩堂 本堂に並ぶ 大師堂 本堂の南に隣る

鎮守権現社

大師堂の南あり

鐘樓

大師堂の向

茶堂

鐘樓の北の傍

二王門

北向門内西側櫻の並本より

笠松

本坊の前より圍凡廿余間

西行笠掛櫻

鐘樓の前より一木の標の下に標の石を立て西行上人の哥を勒り

四國のうしろへゆくりり同行の郡へかへりりるよ
ゆりゆりのちゆりるやもくふれがれた郡なりと

かの回りの人かきとんとかに松よをまけむりをとん

美河くそまのりへ成わんれきふれあがき 西行
化れ世所もろく 寓居されろく 水堂園とろく

41より一軒西ありり西行の菴の菴楯あり

金三ノ十元

山並集 ひろくみ成るてゆりゆりるちんとるてまのつら

兼の庵かきとん 郡へかへりり ちんとるまのつら 西行
寺記に 廿一碑にありりこれに記に

當寺、弘法大師善通寺、洛成、後建、平、自ら、千佛、藥師の、尊像、と、依、つ、金堂、に、安置、給へり、彫楹、玉臺、日尊、と、引、て、終、我、龍、象、拔、と、せ、し、これ

は、元、景、に、海、成、尊、の、名、德、富、長、給、ひ、秘、教、祥、揚、の、道、場、名、は、高、遠、乃、勝、區、り、中、世、と、も、兵、賊、よ、あ、り、實、為、粉、牆、龜、魁、の、棲、り、し、ま、る、所

の、監、寧、生、島、氏、の、家、は、二、野、の、何、が、と、も、あ、れ、と、見、て、感、慨、し、た、く、是、二、間、の、佛、宇、と、造、營、俸、田、數、頗、と、割、り、寄、附、し、つ、し、び、香、燭、を

繼、つ、て、遠、く、施、結、し、と、維、つ、ら、る、凡、世、境、や、金、城、北、は、時、ら、渡、野、綺、乃、お、つ、く、は、布、と、五、岳、南、は、聳、る、碧、巖、鉾、の、く、ら、も、あ、り、今、境、内

曼荼羅寺

傳云

大師善通寺と建
て後又此寺に建の
小金胎兩部の曼荼
羅と地を村に此堂
と立薬師七驅姜
置一の故に曼荼
羅寺と号す

道通院

これと入ると
山崎の松原と
字はふる寺



金三ノ九二

千載集

世とすらの跡は
むう
かひの跡と
はそめん
時とそ
る

海島定長朝



二町四号林木繁蔚して清幽都々莖夏と忘るるなり

此寺元果仁海成尊の二名徳の遺跡といひ傳ふ彼お野の寺と曼荼羅

寺延命院ありて彼此異なりお野の寺あり正行院ありて今お寺

大師御建立の時今の名ありお野の寺も此寺の名と取りて

錢拜師山出釋迦寺 曼荼羅寺の奥院ありて三丁針具ありて七十二番の靈場の前北

本尊 釈迦牟尼佛 弘法大師の作秘佛なり

大師堂 本堂お並ぶ 茶堂 門内の左あり 鐘樓 門内の右あり僧坊

吾のれ野に言ふ十八丁上の絶頂ありて然る此野に堂舎あり其道嶮

岨に諸人登るまじ得じ故に後世此野に寺と建てしれと他むと

捨身ヶ嶽 山上の嶮に野にありて大師のけちれ時求法利生の師試して二重の巖

世坂 峯に登る嶮路といひ諸人杖とあげ岩と取て登臨し

山家集 はんくくのの行道とていふはよれ大師のていふとていふ

やうあり大師の歩經かそとらちせれとていふとていふ山の嶺

ひくもりのそとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

一日毎に登るせせとていふとていふとていふとていふとていふ

傳くところの行道とていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

わたり登るん奉の勢をれりてとていふとていふとていふとていふ

我拜師山のていふとていふとていふとていふとていふとていふ

釈迦如来出現すりてとていふとていふとていふとていふとていふ

やがて夫が上の大師の漸師とていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

山上あり今其趾のていふとていふとていふとていふとていふとていふ

仍道所よりかすてかすていふとていふとていふとていふとていふ

出釈迦山

山家集 やがて夫が上の大師の漸師とていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

山上あり今其趾のていふとていふとていふとていふとていふとていふ

仍道所よりかすてかすていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

大塔持高趾

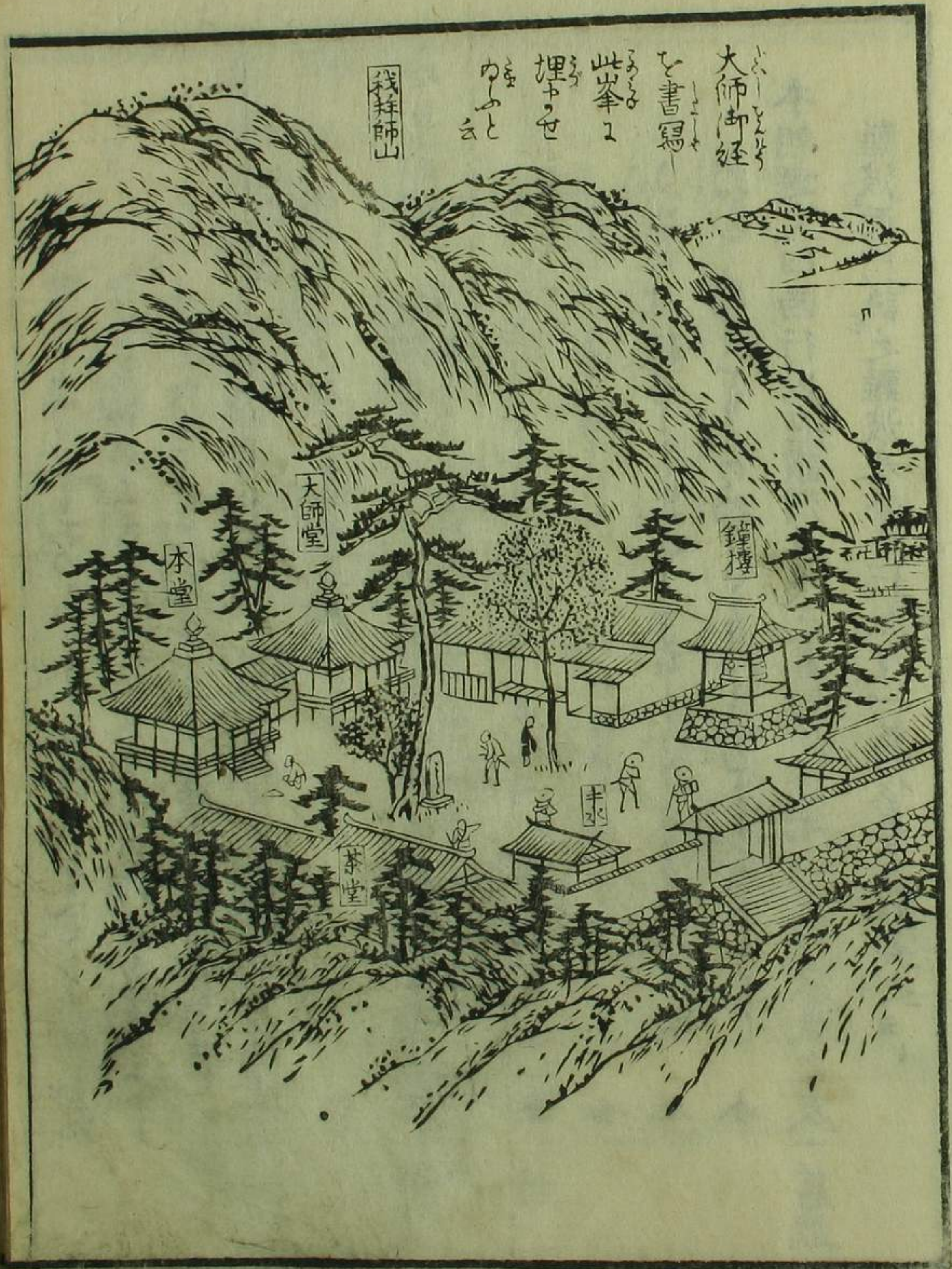
山家集 仍道所よりかすてかすていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふ



大師御経
 此山に
 埋せ
 云と

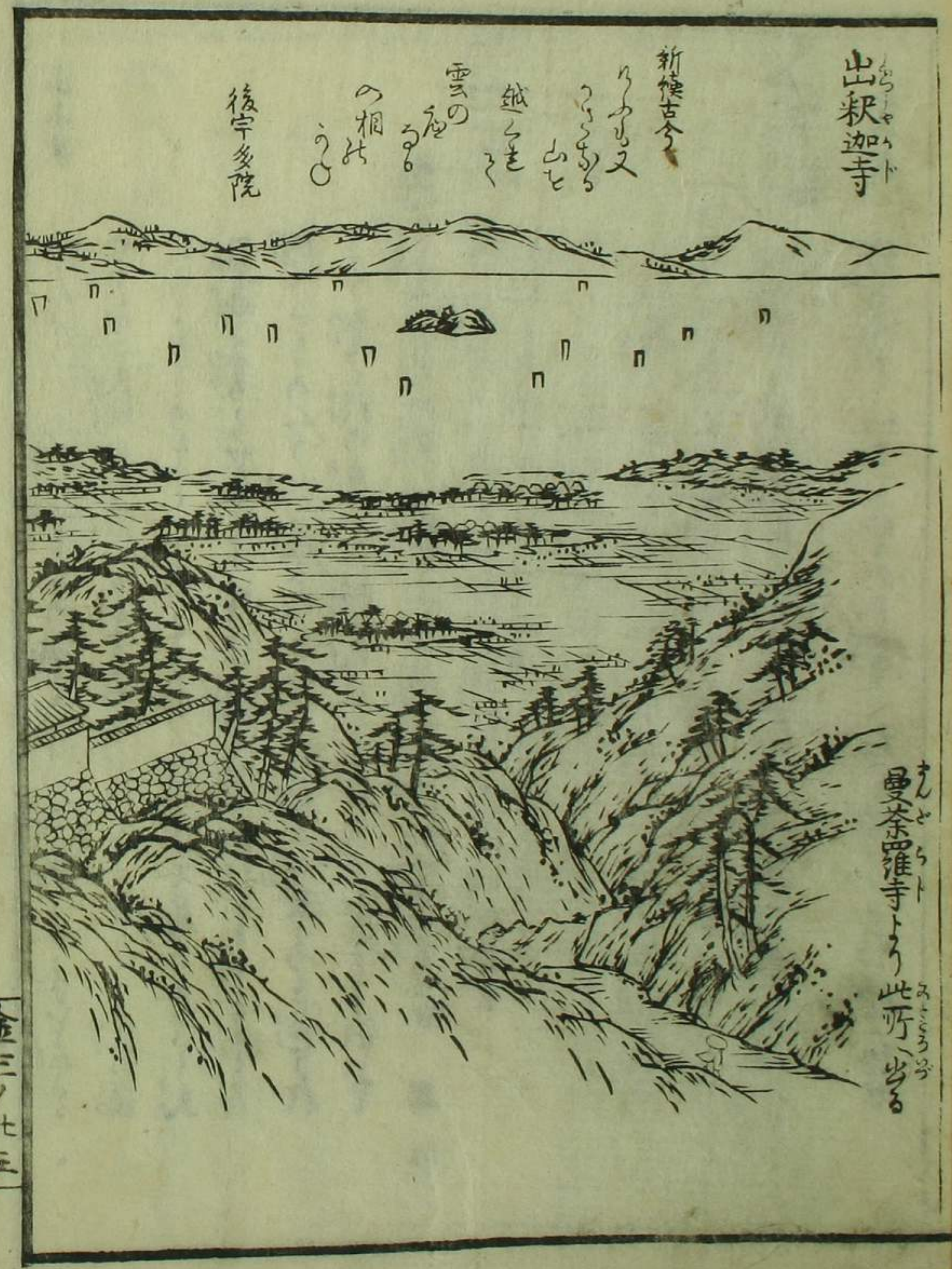
我拜師山

本堂

大師堂

鐘樓

茶堂



出釈迦寺

新樓古今

りつり又

つらつら

山に

紙を

雲の

の相

後宇多院

曼荼羅寺より此所へ出る

金三ノ九三

山本集

これ一國一大師のやうに傳へたるは、この山本集に
くはるる月、つらつと海にのりて、雲をひらき、空をゆくも、
墨もおぼろしく、海の月も、いづれも、水の絶る、いづりも、
西行

今、うらむ、いと、今、あま、い、と、か、る、
住、居、の、あ、れ、も、と、れ、
全

治承二年の秋、この四年西國修行の暇、この山本集に、
と、造、り、ゆ、り、其、末、壽、永、二、年、正、月、廿、二、日、善、通、寺、に、て、書、終、ま、り、と、我、

此善通寺といふ、久のね乃庵といふ所なりん
水莖の岡の湊、
同所の湊、昔、海、に、て、前、の、山、の、海、は、と、い、ひ、
且、此、水、莖、の、岡、の、湊、に、て、諸、船、の、泊、り、と、い、ふ、

高葉集 天霧相日方吹羅之水莖之岡水門爾波立渡

天、霧、相、日、方、吹、羅、の、山、上、天、霧、山、の、こ、ろ、に、水、莖、の、岡、と、い、ふ、

水莖の岡は湊乃波よりも筆の海より、
夫、本、集、と、い、ふ、

本朝通紀前廿五日保延二年秋八月佐藤兵衛尉藤原憲清遁世

憲清者武衛校尉康清之子藤秀卿九世孫也達于馬之藝又讀書曲有

螢雪之勤且習管絃工和歌曾出奥州郷里到京師奉仕鳥羽法皇法皇

以憲清任左兵衛尉為北向之衛士母應制獻和歌息遇日渥然憲清素

有避世之心不屑恩寵一日憲清從弟佐藤憲康者雉半退公憲康語憲

清曰余先祖秀卿征叛夷以朝廷之藩護其餘慶延至于我濟而朝思稍

厚然人間之榮耀不可久持彼山林之下豈無所係慕乎憲清感泣而相

別明晨憲清為候鳥羽院往扣憲康之門門外人聚戶內羣悲憲清問之

家奴曰昨夜主人俄没其母七十歲其妻十九歲憲清大驚彌催哀念乃

將遁世而自謂不拜息君遁世者於我不可也直到鳥羽殿先陪御遊之

席而後奏請出世間之望上皇不肯容憲清不得止歸家脫冠刀終出家

改名於圓位其後改名西行親近之家人亦出家相從號西住西行情不
 遙富貴不阿貴家慈周遊天下無名山景境不歷見之地皆以詠和歌自
 樂風花雪月皆以自詠遺興西常謂和歌者禪定之修行也我由和歌得
 佛法西行將赴關東芒鞋竹杖到遠江國天龍灘寄身於武夫之舟舟中
 一人怒以篋扣西行頭出血西行無少恨憤優然下舟而去西住見之泣
 西行之曰余出塵固知如斯之事不虞之禍猶有大於此何爭乎汝須歸
 鄉西住不得止東西相別自是西行獨步益縱行脚

一書云西行聖人俗姓藤原氏從四位上鳥羽院の下北面左兵衛尉美清
 早次又則清憲清も書りあり然も美清のりく訓儀一同トクバ
 然も下と美清と訓美清決と止二夕結見へも美清書て

義初説謚して然も職系大令上北面諸大夫四位五位任之是
 今昇殿下北面侍之官也萃菴曰林中懽口院泰而為下北面候武者所
 法名圓位千載集大実坊号一亦西行と名新古今集
戴此名

○大職冠鎌足公 不比等 房前 魚名 河辺左大臣 正二位

藤成 伊勢守 伊守 從四位下 魚名五男 豊澤 備前守 從四位上 村雄 左衛門尉 從五位上 秀郷 倭藤太 從四位上

千常 從五位上 將軍 文脩 將軍 內舍人 文行 左衛門尉 從五位上 公光 右衛門尉 從五位下

公清 宮内 左衛門尉 從五位下 李清 左衛門尉 從五位下 康清 左兵衛尉 憲清 下北面 西行

七佛藥師堂 葭原村於婆の池の傍あり 草庵 堂あり 觀世音弘法大師あり

本尊 瑠璃光佛 弘法大師の作

古驗之松 草庵の傍あり 大師の植の所 一々靈驗あり 松の下 標石を建

筆ノ山
筆ノ海之古跡
葭原村



行秋や
踏日多
庵元
庵元道

筆ノ山

金三ノ九七

於婆池 正字未詳 佛薬師の堂の後一面の大池にて恰も湖水の如く國中大池の如く

鳥坂人面石 鳥坂の里端を往還の傍にあり石銘畧し拾遺の篇に委く著し

花立碑 此道係陸州通行の街道にて人馬往来平生小依に

頼政箭止松 廣田村あり其事實詳るるに

樋戸野池 樋戸野村あり大池なり天霧山向うに在り

銀五山千手院弥谷寺 大見村あり四圍靈場第七十一番の札所あり

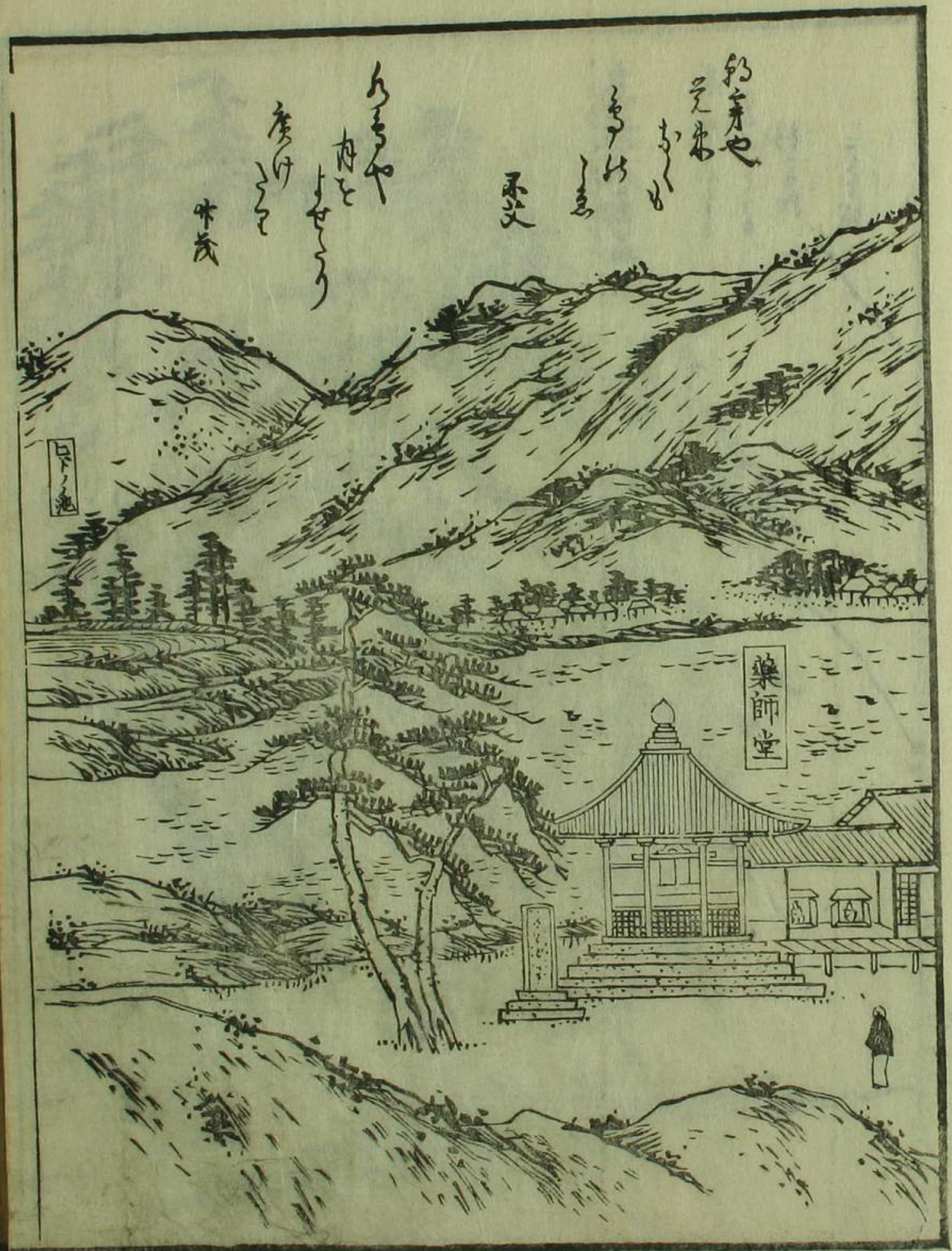
本尊 千手觀世音 長三尺五寸立像人法大師の作大悲圖の存 弥谷寺に在り

脇士 不動明王 毘沙門天 右同依り

護摩岩窟 崖腹に穿ちて護摩壇の洞なり石壇の上不動弥勒弥勒に在り

道範阿闍梨之像 右窟の内傍にあり是は範師此國に配流の時當寺の住持の所望よりて行法肝要抄に擬せしむるに依り

書の具書あり其住持の此像をつくりおけり



乃牙也
是也
ふい
もつれ
しよ
不文
乃牙也
舟と
上せし
彦
中

樂師堂

日ノ池



七佛薬師堂
古松
尾場ノ池
天霧山

天霧山

ラバ池

金三ノ廿八



鳥坂人面石

あつり
とく
杉
こま

水聞特巖窟 魚の窟に於て凡九尺二寸の岩窟なり内四面の岩面は五帶窟空

拜堂 南面あり 石像と安んずる人をもつら西親とて拜し

三尊弥勒佛 本堂の左の磐石小弥勒三尊字の名号九行大師の御筆なり

藏王権現社 復摩岩窟の左の山上より長凡八尺計大師の作則り當山の鎮守

加持氷瀧 復摩堂の右の方より 氷祭納骨所 昔は瀧の下あり

辨財天祠 瀧の上の方より 降叙所 瀧の左の上あり五柄の叙字あり

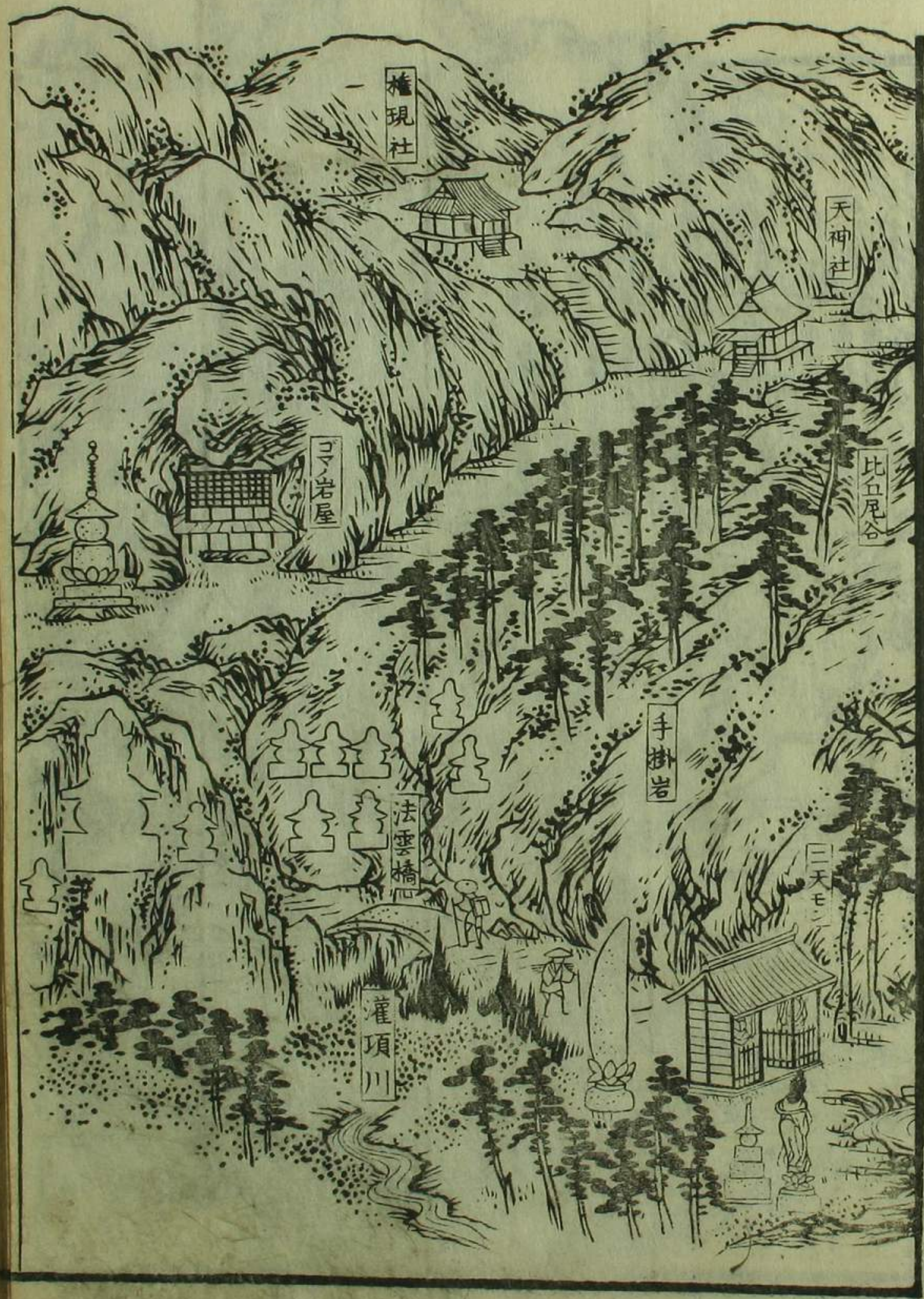
六本杉 瀧の下あり 天神社 権現社の下あり 鐘樓 復摩岩窟の下の方あり

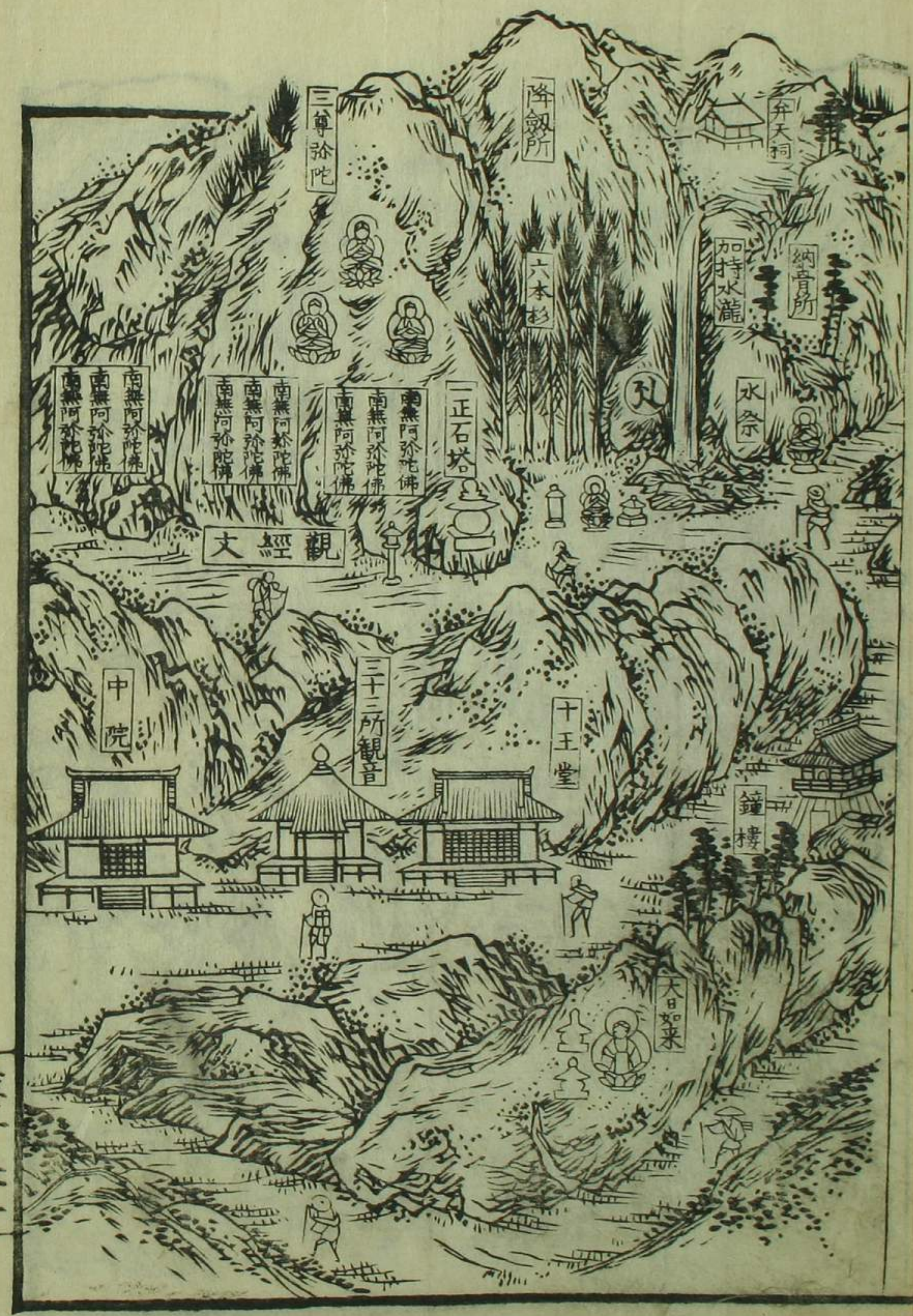
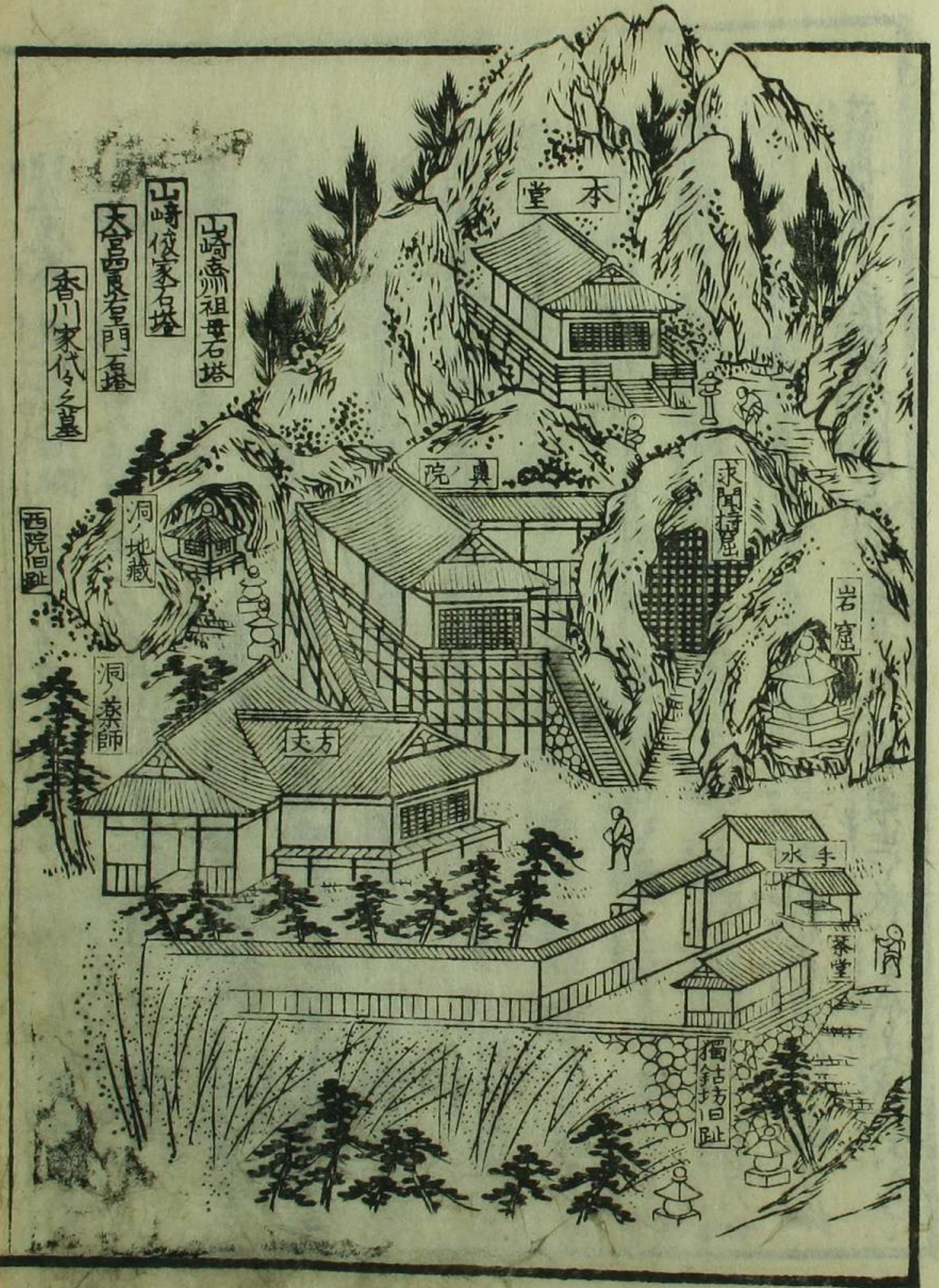
十王堂 鐘樓の向ふより 観音堂 西国三十三所の尊像と安んずる十王堂に

中院 観音堂より一歩弥勒釈迦の二佛と安んずる 洞地藏尊洞薬師佛 方丈あり

茶堂 方丈の門前あり 法雲橋 灌頂の渡り 手掛岩 法雲橋の傍より

二天門 持国天多門天と安んずる 二王門 金剛神の両尊と安んずる 本堂より三行下あり 二天門の向ふあり





比丘尼谷 東院之旧址 権現の社の東あり 瓶岩 三門の上の山腹あり其形似くこゝにて号く
水谷 二天門の前の流の水原より 穴薬師堂 川の向やうり

生駒彦石塔 名号石の岨より 籠軒 石塔對り 納經穴 本堂の右の方に

山崎俊家石塔 山崎志州祖母石塔 大宮四良右衛門石塔 共本堂の西

香川家代々之墓 西院之舊趾 右小同ト 獨鈷坊古跡 茶堂の下の方

栢當山 八皇四十六代 聖武天皇の勅額行基菩薩の開基して 弥陀釈迦乃二

佛安置 蓮華山八國寺と号し 蓋絶頂に登れば 八州一望と号す 故に

然其後弘法大師此山に登臨 給い求聞持の法と修めし 小座下より

銀五柄降り 金色の光赫し 藏権現形と現し 大師坐落せ 廿六世乃如

来祝法の地觀在薩摩度生の初より 菩薩願が 八千手大悲の尊像と造り 伽

藍再尊て 秘宗の法門と開き 普く無後の衆生を救ひの 戒又法味をたて

鎮守 護せん 盟約あり 大師すまら 千手大悲の尊像と造り 新精
舎と号し 給い具藏権現の形像と彫刻 鎮守と号し 給い寶銀五柄降るや
以て 銀五山と号し 又銀の御山の五ヶ所の音同なるも 大師窟と穿り 佛像
と彫刻 或は巖石阿字と鐫し 五輪塔弥陀と尊大日等とあり 其
名号 銀形寶塔形と号し 一山有るも 其の怪岩奇石あり 五輪佛
跡とて 目の接る物足の趾と号し 高峯深谷に至るも 不思議の神跡あり 此
と言ふも 故に 佛各佛とも 凡當山嶮崖崖鬼と号し 幽廻して 隣
おはせし 彼霞と服 風駕と号し 人あり ず 唯うと 此に至らんや 雲霧常
一起 冥木異草 盤く 岩端泉流い 清精神 凄然として 嗜欲更に消は
将つて 八靈寶若干あり 数回兵乱の爲に 失はれたる物
尋らば 就中一奇の 冥寶あり 大師所持の 紫銅の鈴あり 圓三四五乃

像と彫其間ハ二膝并に列む拜するの唱歎せし言又は尚此余は
畧に如監僧坊も兵火焼失且享保五年の春火災ありて焼亡
以今東院西院も其旧址も蓋傳云此峯一登臨する時八州一望
とるが故八國寺と号する何その時より孫谷と書あはせうこれ
全く孫谷の音よりして分まよか國ハ谷の音同とせゆありて或
此後後世附會の説ある孫谷山の俗号してこの峯東北西
一峰は孫谷孫と号する故に孫谷とよぶ孫生孫猛の類いなる下
天霧山 孫谷山の根に連る高山あり香川信景の槍籠る古城の跡あり孫一出入乃
此合戦の旧跡あり一妻一拾遺の表一著
本朝南海治乱記云香川氏其祖鎌倉権五郎景政より出て下総國の姓氏也
世に五郎と以て稱し景とありて名は細川頼之より西濱の地と湯つて
多度郡天霧山と要城と号度津に居住せりト又多度之野豊田郡の

主六香川氏より居城多度津雨霧山也ト云々
同書此雨霧山城と云ハ險阻の高山として大手の路ハ馬も上れば大身
山城あり上の分内も廣くして大兵も納べり水ハ澤山として早魁と
も是の如くハ險要の名城なりト云々
天正二年冬香川兵部大輔元景織田信長一賊徒一幕下候せ
ん更と云ふ信長悦喜斜めハ使者の演説と岡給い養雁つと
給明日報各あつて香川元景一字と賜て信景と稱は
天正七年香川信景土佐の長曾我部元親と和平調ひ元親の次男五
郎次郎と濱州へ呼むる養子と家の女子と妻とせ誓儀と調本城を
渡り此時とて多度津と野豊田と那珂郡と加へて四郡の主と其
所柄も豊饒して衰乱の世とて自余の兵將と越へりト云

香川長曾我部和親

天正七年の春天霧
の城主香川信景
土佐の長曾我部
和季とは香川方
の質として香川山
城守河田七良右衛
同孫太郎二野菊
右門四人の家老
と入る土州番
代に結む信景も
岡豊の府出仕のり
て太刀馬綿



金三ノ元四

細末のすゝ進
せらる元親も
別て用いらまき
食も正武の膳
部能し舞木
りり吾
滞留
あつゝ
飯國の
これ國分
茶座
送らて
送り酒
送り酒
送り酒



天正十二年羽柴秀吉四國征伐よりして香川信景歎けりて養子
五良次郎親政の縁に随ひ雨露の滅と去て土佐國に引取らる

天正十五年八月主駒雅樂頭正規讃岐國に賜る其頃生駒讚岐守正吉出
侍士の内三野菊存保門河田七良兵衛の兩公香川信景の家をたてて名

高き勇士各二千名と下り抱りて勇士も男子數多りて是に分りて
又天正十四年豊後の大友援兵の時長曾我部信親十河存保と共戦死し致し

香川氏部少輔のりり是雨雲の滅し信景のりり北條の香川あり
勝間村の田圃の中より高き天許十二重に積り土俗に弘法大師の依り

本山寶持院長福寺 本山の庄より故に本山寺とも号り靈場七十番の札所

本尊 馬頭觀世音 長二尺五寸弘法大師の作

照士 阿弥陀如来 藥師瑠璃光如来 右同作

御影堂 弘法大師 本堂の左の向あり 茶堂 大師堂並に接待所あり

大塔跡 本堂の右の傍あり小堂と建る 十王堂 大師堂の對に十王并に三
所の觀音三面大黒と安ん

鐘樓 大師堂に隣る 庚申堂 青面金剛童子と安ん 五所権現社 庚申堂
に並ん

二王門 金剛力士の像と安ん 银杏枯木 十王堂の傍より至るの木之今は
幹の存り里俗是を祈願して其驗有

- 無垢淨光陀羅尼經曰
- 造石塔功德有七種
- 一、千萬歲生天宮
- 二、得長命、三、得那羅延力
- 四、得十萬歲內國王位
- 五、得遠離生死身、金剛不壞身
- 六、得三關六通果
- 七、得四十九重寶殿





當寺ハ大同年間弘法大師建立の伽藍にして往古七堂魏々として

天正の兵火かゝり悉く焼失は然るも本堂は恙なく存する故に傳

今も安躰り境内に老松の大樹枝條投跡として幾世も経ぬむいと

閑まじむらうむらう本堂の後古き五輪許りの事實詳るるれども

遍年の古物らるる亦長流の川あり二門とて觀音寺に到る街道

本堂前の腰門は弥勒の通路之蓋此地を本山の庄といふ此より海辺

七里の岬のりて其山の木も故に長くそ別は海岸の端と箱の岬といふ

高良神社

本山寺の左に並ぶ當村の地主神也

本山寺之古楹

本山寺より二計東田圃の中より本山寺建立のた造り掛りて里

七寶山普門院神照寺

植田村より俗に植田の天神といふ本堂南向草庵東向

本尊 觀世音菩薩

天神社

辨財天祠

天神の社に並ぶ

本堂に並ぶ

天神之松

神照寺の境内に技條と偃は俗に植田の松ともいふ

樹の高と五六余幹の太さ壹丈五尺廻東の枝廿五間余西の枝十五間

南北之枝二十二間余年々繁茂して枝毎に数本の束枝と立て是を

支石實や泰山の松樹始自天の雨と禦ぐり形勢も想像するの大木

わり往返の旅人あり来て賞美せむといふ支あり

本山寺之古楹

土中に出る凡五尺余首

柄と納む鑿あり木八平

檨るる本山寺建立の残木

ありと言傳ふまに何の故に

言ひて詳らるる都會の地よりせむ



琴彈八幡宮

觀音寺の庄の霊場
第六十八番札所あり

社僧 觀音寺

委く、次一記に

本社 應神天皇

大寶二年豊前国守佐より御遷座

高良社

武内大臣本社の右に並ぶ

住吉社

住吉三神本社の左に列す

若宮権現社

住吉の社の南にあり

大師堂

弘法大師の安ん

鐘樓

本社の階下あり

九重塔

石を造る鐘

中之菴

山の半腹にあり

龍宮 風ノ宮

中之菴の向に並ぶ

天神社

中之菴の

鹿嶋神社禁の岨

一之鳥居

簾の板にあり

二之鳥居

山の半腹にあり

宿居

一之鳥居の北の傍の芝原に御祭八月十五日神輿此方へ渡御あり

十王堂

宿居の傍にあり

下ノ菴

十五堂の傍にあり

梅腋の濱

此所の濱に

當社、人皇四十二代武天天皇の御宇、大寶二年豊前国守佐の宮より八幡大神宮に移らせ給ふ。其時、夕日晝夜も西方に天鳴動し、黒

金三ノ九

雲おひ日月の光と隠れ國氏あやしく如何なるまきづり行し西方の空より白雲虹のや併に當山にかけたり。然りて此山の麓梅腋は海濱に一艘の怪船あり、中一琴は音ありて其音美妙し。嶺松に通ふその頃、此山止住の上人あり、名を日澄といひ、此上人船に近づきて、いささか神人として在り、何事と云ふに、此の山に給ふて同答て曰、我は長幡大菩薩なり。帝都に近づき擁護せんが爲、宇佐より出此地、是らるが故に、楳嶺上人又曰、疑惑の凡夫、異端と見え、信どぐり希く、過迷の人のことを、靈異と云へ給へ、然るに其夜、忽ち海水十有余町の程、緑竹の茂藪あり、又沙濱十歩余、松樹の林と云き、緒氏此奇怪と感嘆せ、彼の言をひり、上人郡郷に觸て、十二の菓の童兒、木の欲津か、その數百人を集め、この山の竹乃谷より御船を嶺上より引あげ、齋紀し、琴彈別

宮ノ跡ニ奉る御琴并び御船今殿内ノ宗ヲ奉る尚奇怪の靈天教
回ノ事ありし人則ち此船神功皇后異國征伐の以乘のい一轅
ありと言傳ふ蓋八幡の御夏朝家の御宗廟とい別して異國降伏
の灵神あり故に當宮西海に臨給其武内大臣任吉明神若宮權現
の祠といれ七十五神の伴社山中に充滿る中にも青丹明神とい
て上首といは此山岩密崎嶇して三方に滄海渺々山嶽此神秀灵
仙の窟宅なり所といふ一羊腹一華表と立林藤一石の鳥居あり近世勅
額と給りし縁起権中納言實秋郷の筆にて足利將軍は此神あり

什寶

御神琴 神功皇后御遺器大宮二年自豐前国宇佐宮御遷座之時船中
御愛撫之靈琴今猶存當社第一之灵宝最海内一品也

御船之靈材之箇 同時御着岸之御乘船残木也

右御船之性昔より安殿に納めたまつ所享保廿一年丙辰春二月八日の曉
災火に罹りて焼失は然も其材之箇今も焼く餘存して今も存
琴彈八幡之所大菩薩御垂跡御縁起云今此御乘船是神功皇后異國征
代之時自然出現之兵船也云

又曰出現一艘船是非人倫之造非化人作竜宮出現之兵船也即不論氷
陸虚空神通宝船也

古鏡 一面 神代遺品 神功皇后御愛物

右の突鏡上古宮殿の裡に於て失ふ然るに数百年を歴て二十三世僧
正高源兼元四年庚午にこれに池中に湯より上代の國を以て是を
合はし遠く又重量も同しこれに依りて神鏡といふことを知る最威験あり
うり故に其地を以て鏡の池と云今末院の地内より院号を鏡照院と云

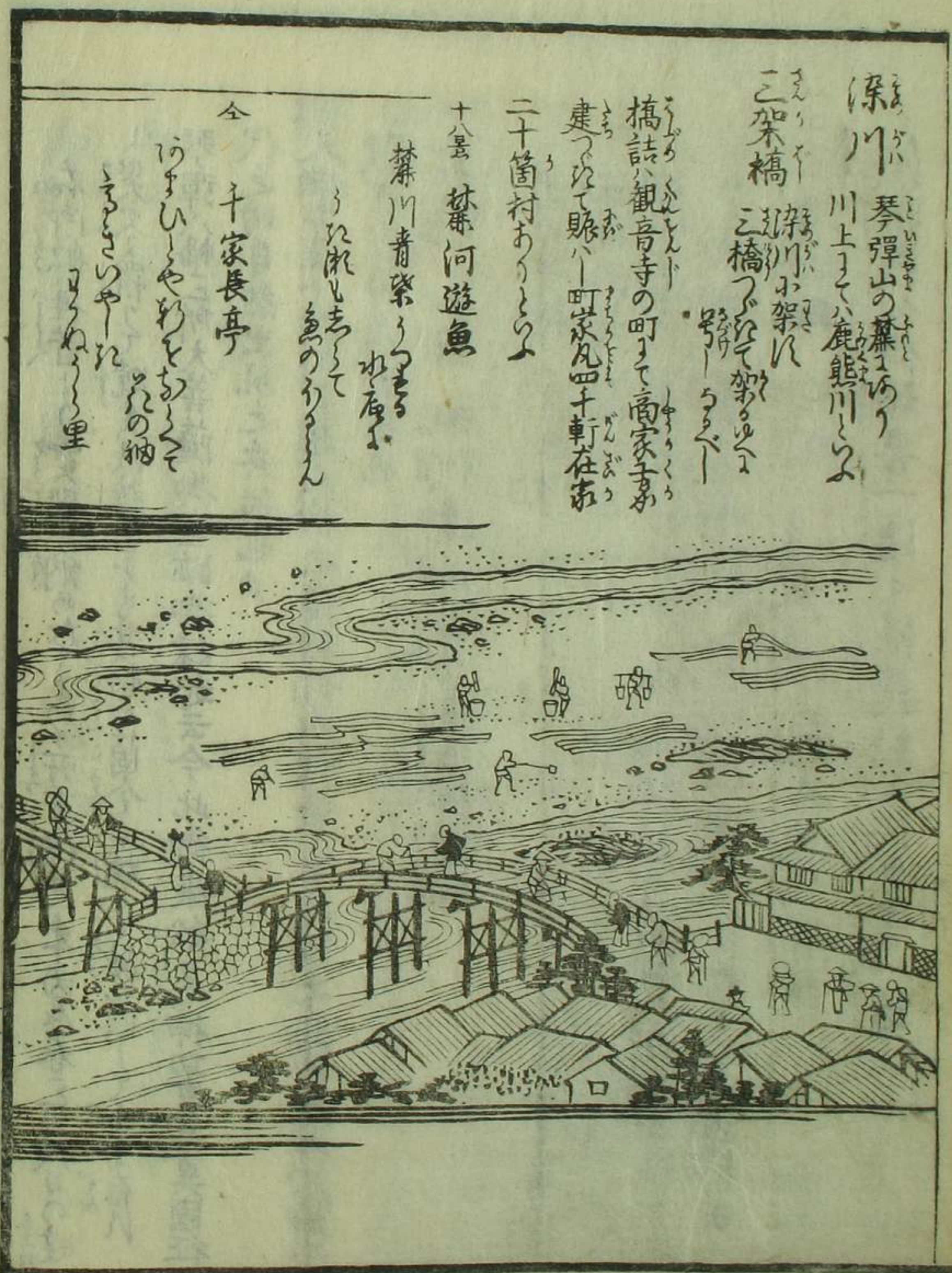
三所御劔 三振 三条宗近作 源義經公寄附

源頼義公御願書一通。源義經公御願書一通



橋下の河魚は
在家より来り
て柳市にまぐ
る

楚日
布
親人の
赤さや
りじ



深川 琴弾山の麓あり
川上まで鹿熊川といふ
二架橋 深川お架け
橋詰観音寺の町まで高家寺あり
建てて賑い町家凡四十軒在り
二十箇村ありといふ

十畧 禁河遊魚

今 千家長亭

いよいよやれとおくそ
まゝのやれ
日ぬき里

金三ノ四十一

夫此山に方ひて海と見ると一有明の濱と呼
て東西數町の二面の真砂地にて山の裾は
ゆるゆると置と敷る如きの磯辺より山路も海に對する平素
風烈くしてねちのづら高くのびた地は偃て這々如く踊るごとく
其形孰か異るるが如し由来かゝる松のこゝと小柴茅堂の類ひも生
せば洗ふが如く砂山をば其美是るる言は絶く松又向く極
の灘伊吹大島ととり吉備の山と中國路九州なども是れ見雄手
後洲の山嶺と後手は稲積秩父峠箱の岬江浦山澳を行
船湊へ入舟破り引細浦の釣船衝鷗の飛ぶも皆此山の風景
とて殊更なるも有明の月の夜あつるの眺望は八須磨も明をも
中へ及びがごとく想像せむ

象が鼻

社頭の東北にありて山の端にありて岩のかゝる象の鼻の如く故に号す

竹溪

宿居の西の山方より舟舟と引上り古跡とす

問答石

宿居の西の山のすそより日澄上人八幡大菩薩と問答しつゝの跡とす

二本松

有明の南にありて古松ありて北谷 社頭の北の谷間とす

七寶山觀音寺

琴彈山の半腹より則神宮寺社僧あり四國遍禮弟子千九番の
礼所あり

本尊 正觀世音菩薩

座像の長二尺五寸私法大師作
中金堂とす

愛染堂

本堂の向ふより愛染明王 大師堂 私法大師と安んずる愛染堂あり
大威徳明王と安んずる

西金堂

正面證道の上より安んずる 脇士四天王 共に私法大師の作
薬師如来と安んずる

宝塔舊跡

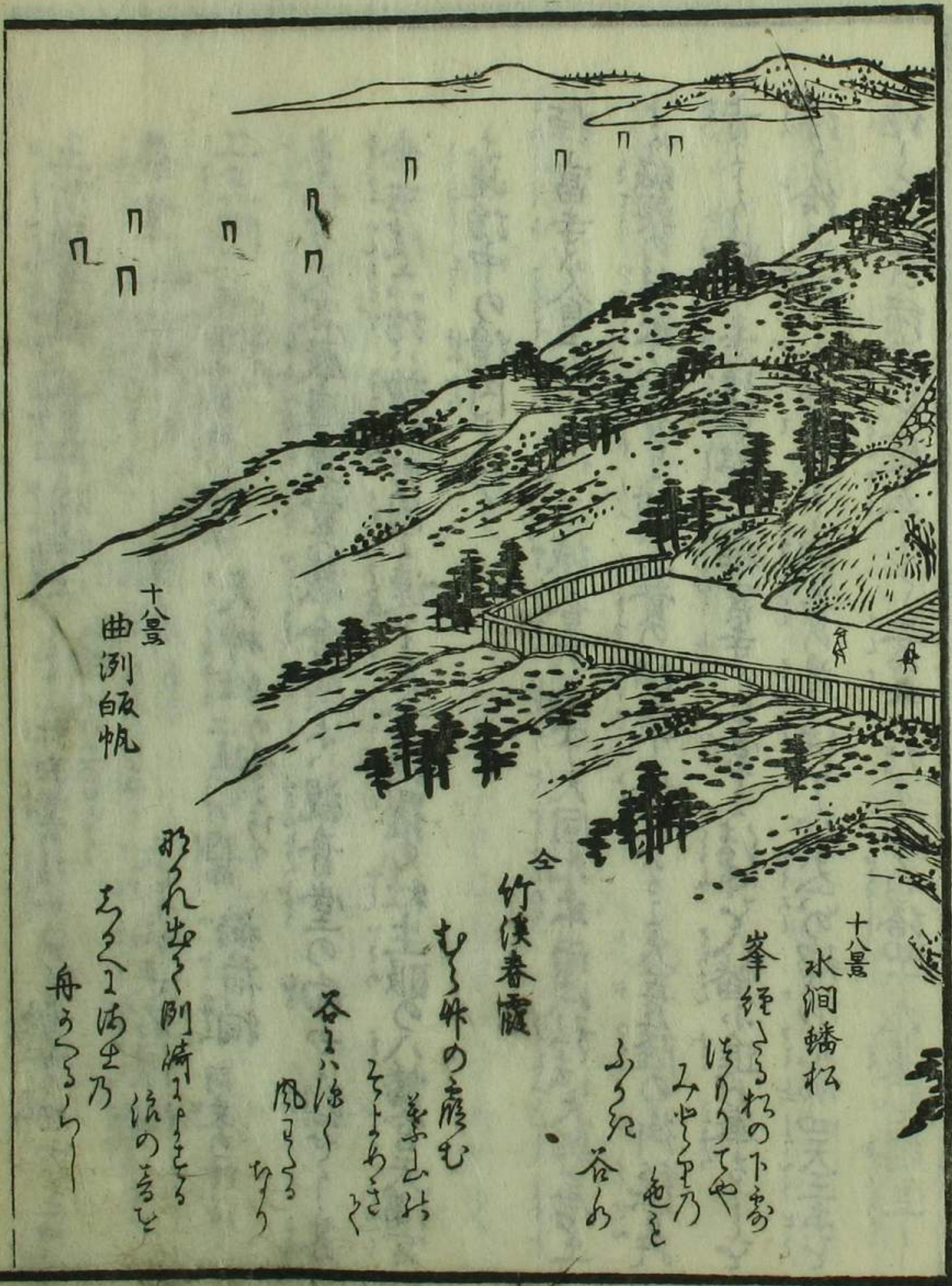
遍照塔 宝塔の向に並ぶ小堂あり柱の左右
1日天月の彫物あり揚ぐ

弥勒堂

正面弥勒菩薩と安んずる 毘沙門天王左右に開き日澄上人の像と置す

太子堂

弥勒堂の右より聖徳太子と安んずる 龍堂 中金堂太子堂の間にあり
地藏菩薩評梨帝母と安んずる

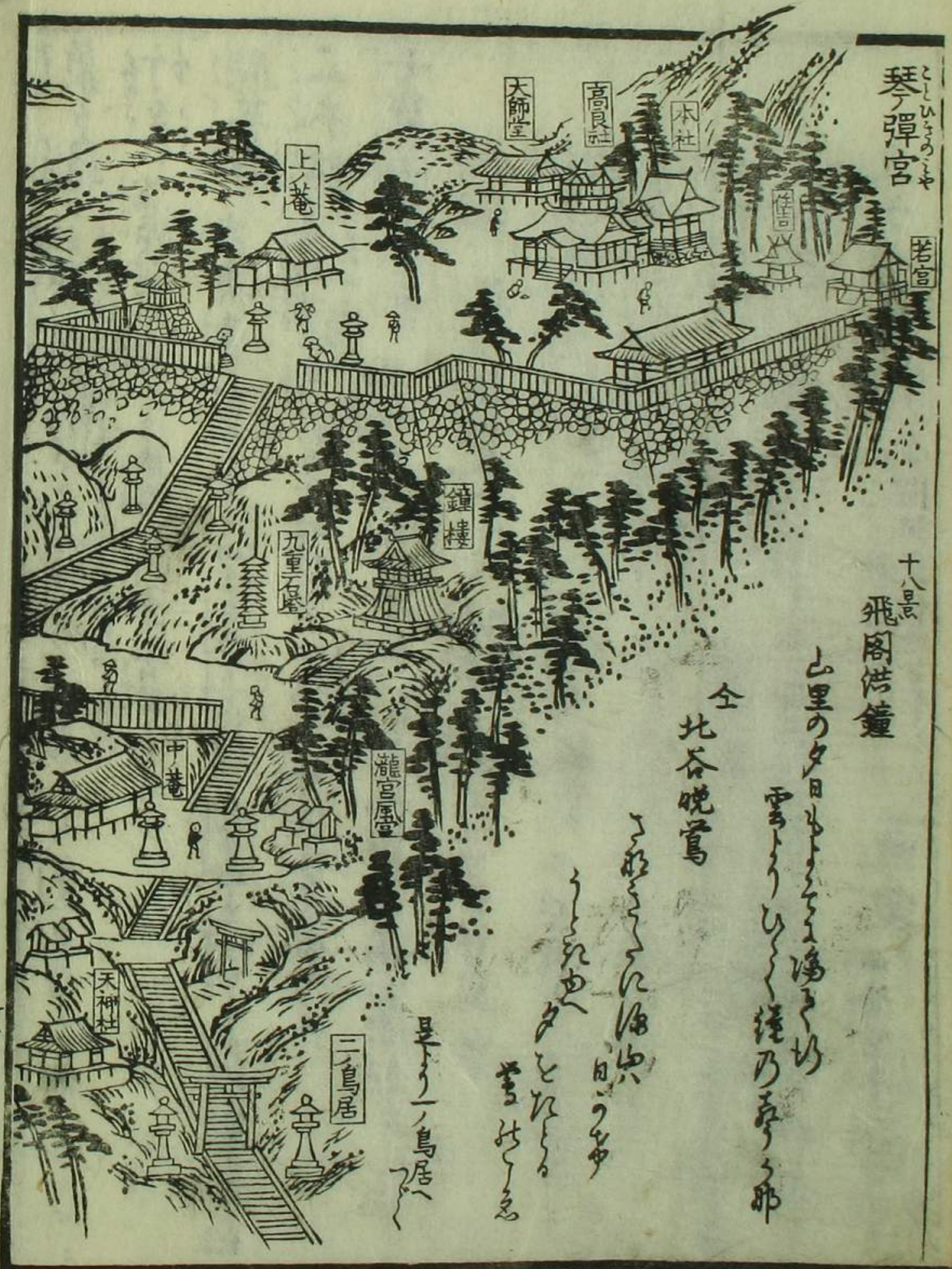


十八景
曲洲白帆

形れぬく剛崎の山
あまの海を乃
舟うららけ

竹溪春霞
むらサの庭む
谷の海

十八景
水洞蟠松
峯経るる松の下
ほりりてや
みやまの乃
ふらぬ 谷の



琴弾宮

十八景
飛閣塔鐘

全
北谷晚寫
山里の夕日
雲のりりり
鐘乃あやふ那

鳥居
早下り鳥居へ

金三ノ四十五

五所権現社 青丹明神社 の併社の上首あり

茶堂 弥勒堂の下より 鐘樓 茶堂の左 五智如来石像 愛染堂の傍あり

二王門 南面金剛神の両像 天神社 二王門の内西 桐荷祠 同東の傍あり

本坊方丈客殿庫裏寶藏倉庫木觀音堂の向ふに列せり其
余末院六坊惣門の内一連に且金毘羅の社生眼の八幡宮天満宮

亦此坊中の境内あり

挿當寺八皇五代平城天皇の御宇大同元年丙戌弘法大師唐土

より啟朝の後琴彈宮に請で賽の法施給ひりて大菩薩の御純眞

旨より此地寺院に營み神宮寺に常は法味を八幡小進を奉るるに

謀り給ひ則ち大師手づつ觀音の尊像をい丈の瑠璃光佛四天王と

作せ給ひ諸堂を建立し安置なす石塔四十九基を起立し

金三ノ四十六

蓋都牟の四九重を表し給ひりて又大師七種の珍寶を此山に納め
の鎮押し給ひ故に七寶山と稱れり山八葉をかきり且九所の秘窟
ありて金剛界胎藏界を表れり

寺中七坊 鏡照院 和合院 不動院 慈眼院 惣持院 寂靜院 泉藏院

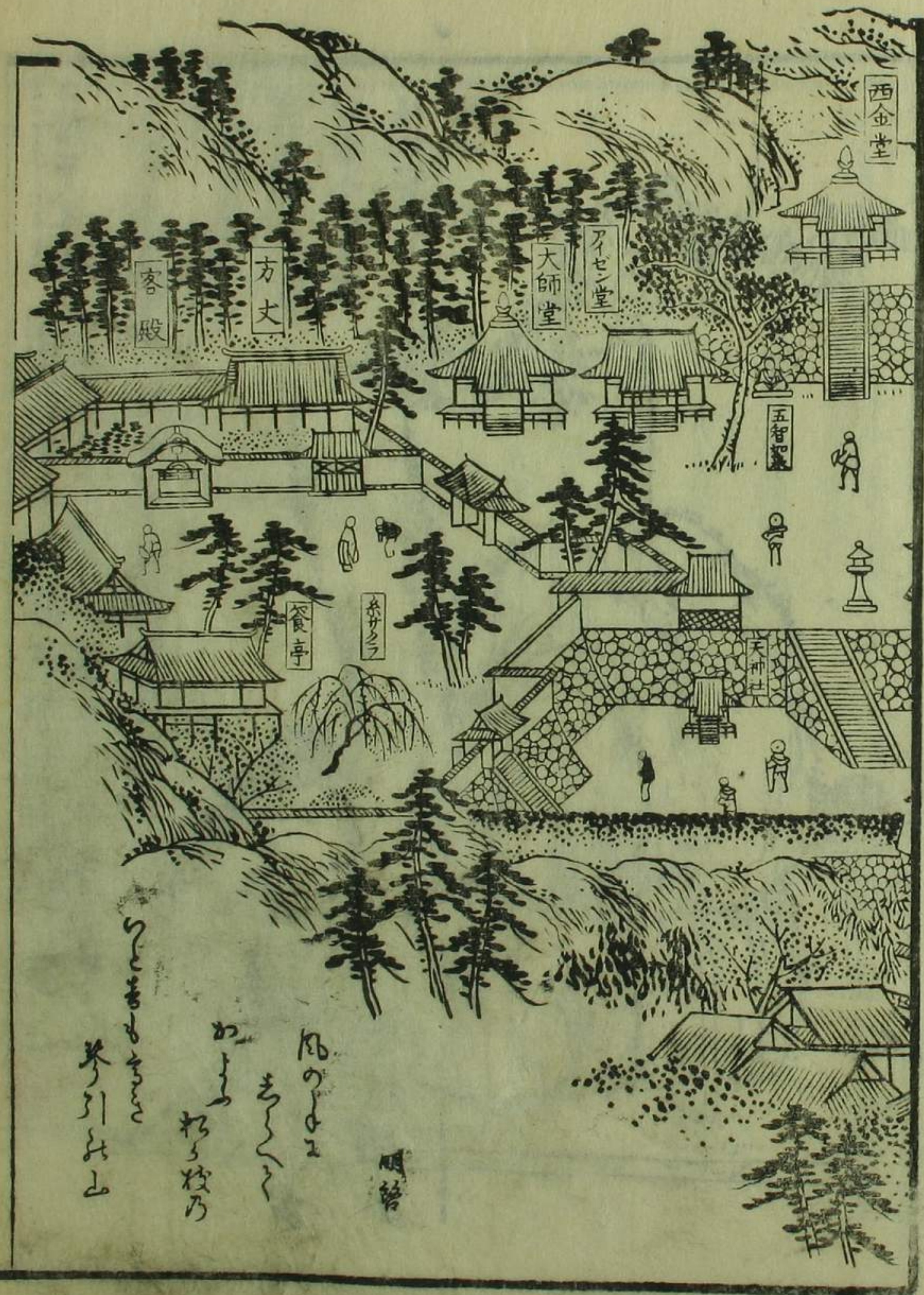
則當寺八幡宮守護の社僧に無本寺之寺傳少所の御證文あり

甚文之曰

寛文七丁未奉因二月十八日 御判あり

元

櫻波國豊田郡琴引八幡社僧觀音寺と雲田寺と地蔵院
本末統相傳双方中合令礼敬交觀音寺と琴引八幡社
社僧と儀古統又各給お見は亦近代從地蔵院法流お傳
儀も各給相問し維然社僧と本寺と有るる多儀と兼白
後觀音寺止威罷傳社僧と從儀寺お勤他正月礼儀と
儀も各給在來にお勤者也乃從從地蔵院



日澄上人之墓

宿居のその傍にあり富士山開基日澄上人入定の地ありといふ
巨巖に重石より遠近の平塔婆と建てる傍に楠の大木あり
石の平塔婆の面、引千百回忌倍増風光塔下簀ノ

大般若經曰

章都波安是如來

靈廟也如來靈

塔也如來室

塔也



金三ノ四六八

芭蕉翁早苗塚

上人の塚の前の傍にあり近頃古碑の後辺に俳友新不碑と建てる
且石垣燈籠等あり造る

古碑之面 芭蕉翁早苗塚

新碑之面 早苗のれりりややうー志のし樹ーとをた
舞曰

先人帶河文魚也者埋翁真跡之短冊立此碑焉
歷年既久而將頽蕪仍於社友再修之

昔惟天保十龍次己亥年十月上院

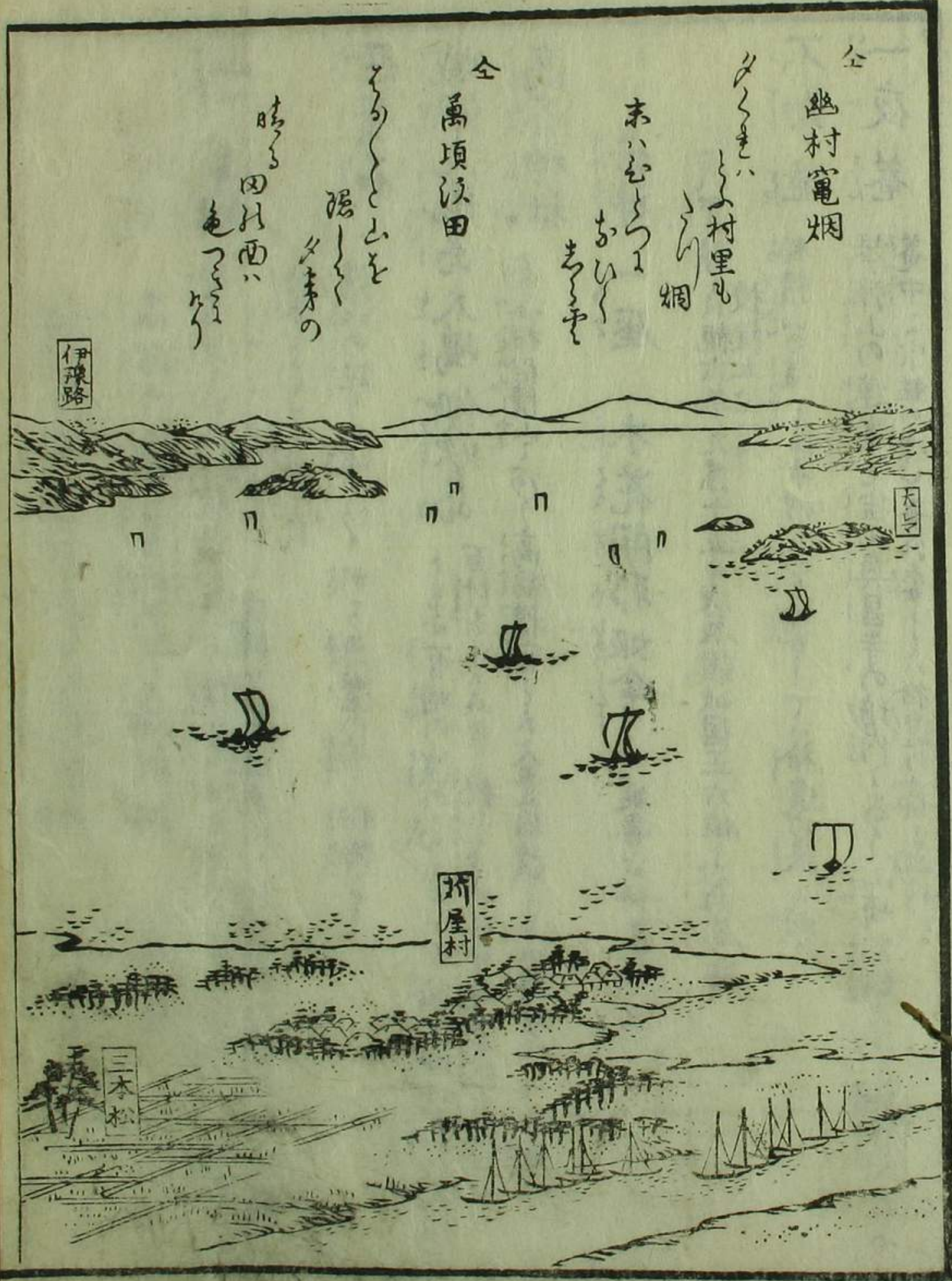
發起 早日庵五蕉

百泉 鶯居

木非 苔石

社 麥木火





全
幽村竈烟

夕ぐせハ
村里も
烟
末はむらさ
かいろ
まき

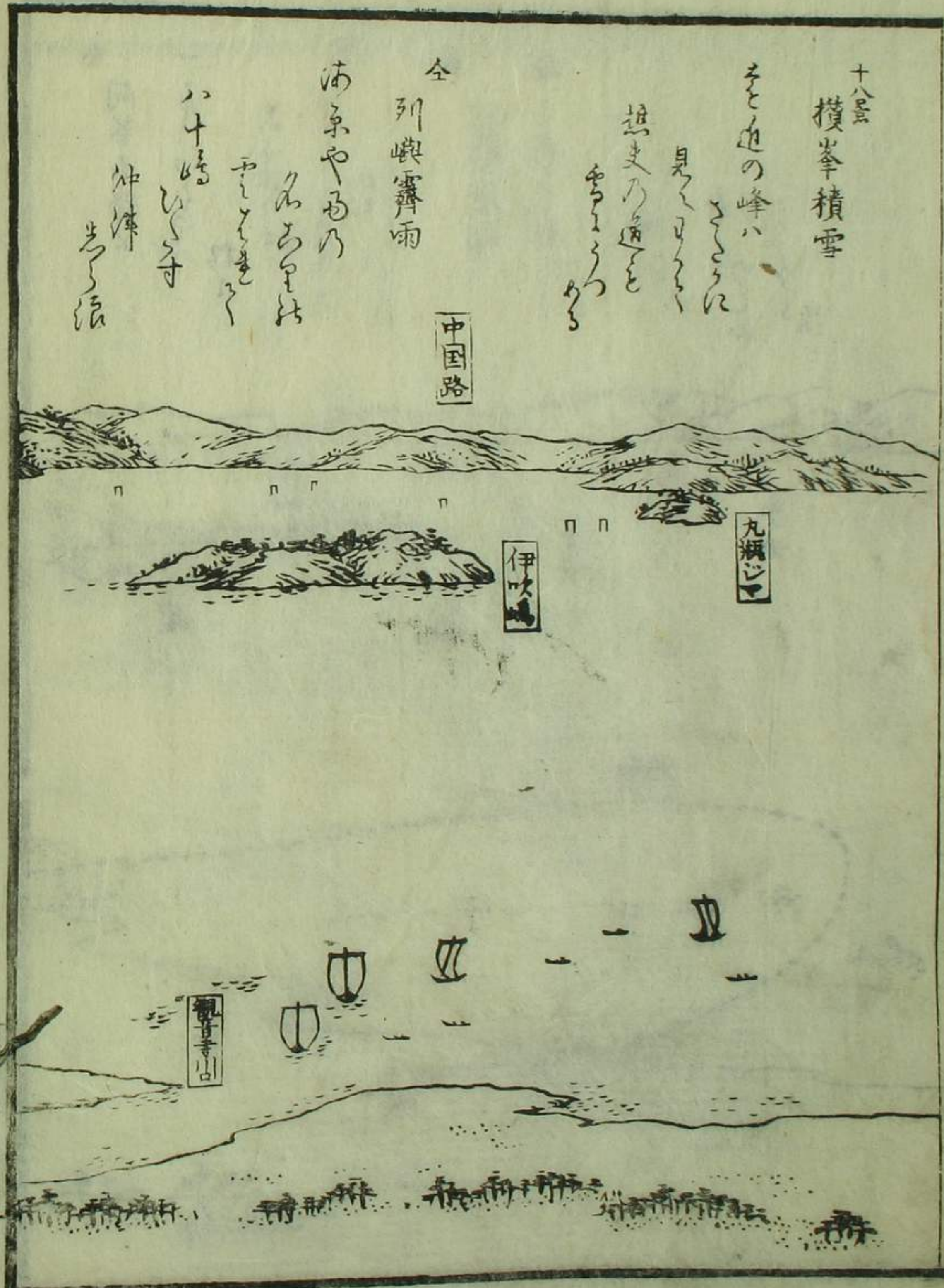
全
萬頃沃田

この山を
隔てて
夕暮の
晴々
田は西に
色ついで

伊豫路

新屋村

三本松



十八景
横峯積雪

そと迫の峰ハ
見く日く
拙支の道も
ちりちり

全
列嶼霽雨

海系や西乃
名あるは
予いそぎ
八十崎
いそぎ
仲津
きつ浪

中国路

丸瓶

伊吹

聖徳寺

全三ノ五十一

在のや 後 陰をくくし 雨を 舟 静

本枯の夜は 有明の月を 舟 静

山口清水

蘇我の屋敷より金剛水もつる傳云く大師ありせり所を破迎とて清水とてりて月用とて

悪魔石

清水の辺りの岨より形を悪魔の面と彷彿とす

燧灘丸瓶島大嶋伊吹島

百計ありて此里に觀音寺の坊中泉藏院在在

高谷神社

高谷村稻積山より高稻積宮と云ふ豊稻積も云稻積明神と稱す

祭神 一座 木花開耶姫命 延喜式神名帳出

二代實錄貞觀六年九月十五日戊辰讀岐国正六位上高谷神

不動ノ籠

稻積山の後方岡本村より委しく拾遺の米一圓

一夜菴

琴弾山の連峯七宝山真昌寺の境内あり山崎宗鑑より一坐居るといふ菴中より宗鑑の像と安ん奉り拾遺の米一圓

三ノ年三

宗鑑近江國の住人として緒方宗禰の長子支那孫二郎と稱し又通稱實三郎と号し乾山光琳の兄あり足利家仕へ後城南山崎小隱遁に故山崎と稱し書法光悦流に連し連歎おとび俳諧と能以天文十二年より没し年八十五とぞ一夜菴の説話さるる有るとも茲に洩し

伊勢二郎義盛智謀之古趾

琴弾山の麓とて古趾の標ありてあはれ義盛表記云云義盛十七騎とて成直が二十余騎と徒下時出會り

元暦年間源義経屋島平家と合戦の時分平軍阿波臣部太輔成能

が子息傳内左衛門尉成直と十余騎と平して河野四郎通信と攻んとて

伊豫國越々つと岡下と義経伊勢二郎義盛と命とて渠と召捕てある

べと下知りつと義盛乗つと先下鶴の男一人と呼び腰巾とさせ義表

笠小旅籠おと持せ傳内左衛門に伺ひ遇う言とて様と未女とて教へ一日路先へ立せて伊豫の國越々つと義盛十七騎の良黨と具して一日路後まで向ひりて人々をみれば見れば嗚呼あは為業たる僅十七騎の



油以〜〜雪の
田を〜〜
南枝

伊勢二郎義盛謀り
以て傳内右衛門成真
三千余騎し降参せむ



金三ノ五十三

勢よりつて二千余騎の兵を捕んと余りたる大膽なりと言ひつゝなる
傳内左衛門河野が鉞向いゝとも通信、屋島の合戦加りて國を
らまに残る家子郎等と多く討取館火とけ生捕りも許さず連
て屋島の合戦も是れより伊豫の國より後波とて飯に道
彼下臈の男小會成直是と見て已へ何所より何國へ通る者なく同屋
島より伊豫罷る者も候と答ふ備屋島は合戦より同男答
つて云様伊豫國の河野四郎殿の伯父福良新三郎殿の頭實檢の源の
九郎判官より名つて雲霞の勢屋島の内裏へ押寄せ野軍に候
いゝ源氏の爲に内裏と焼きて平家船小乗て下會く戦ひ恰い程
平家は無勢源氏も勢おられ終つて平家負て生捕りもつた
あつて其数も中にも阿波の大輔の降人系れ河野四郎殿は千余騎

て屋島馳つて日本國九國より軍勢救萬馳集り阿波後波の浦に源氏の軍
勢元満より結て過成島河より心弱く其父大輔も降人出り向
り旁に臆つて去り下臈の鏡の夏もれ信用も不足は尚も
阿波と馬と行く行程後波國

源平盛衰記に本郡琴造官より考ふる小本郡琴造官と云はる本郡
東隣りて西香東山田の二郡つた東寒川郡小列り南阿州阿波郡隣り然
るに伊豫國に到る便に聊もは豊田郡琴彈官より豊田郡西濱より
西伊豫國より往返の街道より東隣りて二郡郡と云はる豊田に
心海遠い二郡と云はる官に於て琴造書撰りあり故に改め
豊田郡琴彈官の所より伊勢三郎義盛傳内左衛門行會より義盛鑑
よりまぢつたの傳内左衛門に見る御同是源氏の良等伊勢三郎義盛と
い者平家倉嶋の軍に負け内裏以下人の家皆焼く大臣の父子小松の公

達耻ある大庭虜らま給ふ汝又民部の太輔頼と延て降今素は櫻岡の大夫
勝浦にて虜ら此二人義盛頼と汝又降今も頼と延て櫻岡の大夫と
通まがく源氏に隨ひ奉るは猶意趣あるか頼も見故郷の飯ん
と欲は義盛頼して善計りし斯りて昔に給く通侍もた
取直し失束と解成直とて下賜詞のい今義盛が演言相違ひと
思ひ及又降泰の上成直りつて同ト事とてち甲と脱とて成盛
に従ふ我盛降人の法とて大将の許し将向ふ是義盛が謀とてわく僅
十七騎りつて二十余騎と容易く従へて古今に雙びおた勳切なき判
官あれと賞し給ふ又民部大夫安降系せにわくも既に成直虜
らまわく因に且平家の軍を束かと思ふ折く成直大将の命とて入状
と遣は源平之合戦勝劣雲泥也後勅有忠前降源家早任伺心之思必逐二面

謁之志く書く斯一程成能も源氏に頼ふ故に彼國の任人等皆みく
源氏に属れと云

金毘羅泰治名行國會二之巻終

